

## 1. チャイナ・ウォッチングの情報源

### ① 主要指導者の発言に注目する

中国の政治は「法治」ではなく、「人治」によるとよくいわれる。「人治」が望ましいのではなく、因習として克服すべきものとされながら、なお克服しえていないのである。それだけではない。中国のような大国をとにもかくにもまとめていくためには、「この指とまれ」式の目標が不可欠である。たとえば草原に広がる羊の群を想定してみよう。これらの大群を水辺や草の多い草原に導くためには、羊飼いの道案内がなくてはならない。中国共産党が指導者たちに序列をつけて、その序列を守ることによって、指導体制を明確にし、指揮命令系統の核心を明示しようとしていることには、それなりの必要性があつてのことなのである。羊飼いのほかに、羊を導く「帯頭羊」もいる。これは山羊の別名であり、羊ではない。われわれは指導者たちの発言に十分に注目しなければならない。

### ② 中国の顔 — 胡錦濤総書記・国家主席

「党員にあらざれば人に非ず」、というのはむろん誇張だが、中国で党員ではない著名人を探すのは難しい。中国で単に「党」といえば、中国共産党を指す。中国は共産党の天下だ。党員は6500万を超える。創立は1921年、ロシア革命にならって「社会主義革命」をやるために組織された党だが、いま進めている政策は資本主義経済を目指すものだ。長らく革命闘争、地下闘争を続けた体質を色濃く残しており、この体質は容易に改められない。最も際立つのは「民主集中制」と呼ばれる上意下達のシステムである。2002年秋の党大会で中央委員会198名、中央候補委員158名が選ばれ、そこで政治局メンバー（政治局委員25名、うち政治局常務委員9名）と総書記胡錦濤が選ばれた。党員代表2120名が大会を通じて中央委員と政治局メンバーを選んだわけだが、大会が終わると上下関係は逆転して、あたかも総書記が全党に指揮命令を下す構造に変身する。中国を動かしているのは、なによりも「党」であり、「政治局」であり、そのトップに胡錦濤が立つ。

中国の政治は法治ではなく人治であり、人事は「党に始まり、党に終わる」と言われて久しいが、党がすべてを直接「代行」することは、近年きわだって減少してきた。たとえば経済の分野では、党組織のない企業や非党員マネージャーの活躍も目立つ。しかし行政であれ、その他機関であれ、中国を動かしているのは、圧倒的に党組織であり、党員幹部であることを忘れてはならない。「党」の次に出てくるキーワードは、「党政軍」の言い方である。ここで「政」とは「行政」すなわち国務院を指す。「軍」は人民解放軍を指す。行政担当者の人事を決めるのも、行政の基本方針を決めるのも「党」だが、選抜基準は大転換した。

国務院（日本の内閣）から「イデオロギー官僚」は一掃され、各分野における「行

政のプロ」が部長（日本の大臣）や副部長（日本の次官）に選ばれる。国務院の高級官僚たちは、なによりも行政畑を歩んできたテクノクラートである。そして同時に党員でもある。日本の高級官僚は「選挙の洗礼」を受けて大臣になる。中国の部長（すなわち大臣）は、選挙の関門を必要としない。日本では素人大臣の失言が繰り返されるが、中国ではこの現象はありえない仕組みだ。

党政軍の次に来るのが「国家機関」である。中央では全国人民代表大会（日本の国会に相当）がそれであり、省レベルには省級人民代表大会（日本の県議会に相当）がある。西側では「立法・司法・行政の三権分立」という。立法＝人民代表大会、行政＝国務院と並ぶ司法機関は、中国では中央に最高人民法院、最高人民検察院があり、省級には「高級人民法院、高級人民検察院」がある。だが、司法の独立性はきわめて弱い。「党がエライか、法がエライか」という議論がよく行われる。「党の決定」が事実上「法律の規定」に優先するケースさえ見られる。「人治」を克服すること、法制化・制度化、すなわち法治への課題は大きい。

中国の新しい顔・胡錦濤は、就任およそ1年でイメージを確立することに成功したようだ。1942年12月生まれ、今年62歳だ。原籍は安徽省績溪县。59年清華大学水利工程系に入学し、64年に中国共産党に入党。65年卒業後、母校の「政治輔導員」となり、68年から水利電力部劉家峡工程局で働いた。74年から14年間にわたって甘肅省で働き、甘肅省党委員会書記（77年6月～81年1月）を務めていた伯樂・宋平〔元政治局常務委員〕の眼鏡にかなない、抜擢された。共産主義青年団甘肅省委員会書記を経て、中央に抜擢され共青团第一書記になった。共青团は党の予備軍であり、中国ではエリート養成コースだ。第12回党大会で中央候補委員に選ばれ、85年に中共貴州省委員会書記として地方へ出るが、当時43歳、最も若い省書記であった（省級党書記は国務院部長すなわち閣僚級と同格）。85年9月、12期中央委員に増補され正中央委員。87年の第13回党大会で中央委員再選。88年にチベット自治区書記に転じたが、過労のため体調を崩した。北京で療養中の92年秋、第14回党大会が開かれ、政治局常務委員に大抜擢された。宋平が引退するポストを譲ったのだ。49歳の若さであった（李瑞環の常務委員昇格は55歳であるから、胡錦濤の若さが際立つ）。胡錦濤は鄧小平による「第三梯隊」建設の受益者だ。97年第15回党大会で政治局常務委員に再選され、03年秋の党大会で総書記、04年春の全人代で国家主席に選ばれた。

以上の経歴から分かる出世のポイントはなにか。「天性のナンバーツー活動家」と呼ばれるように、胡錦濤はいつも控え目に行動しており、敵をつくることがない。さらにもう一つの運がついていた。共青团のボス胡耀邦失脚事件の時、胡錦濤は政争の嵐が吹きすさぶ中央にはおらず、たまたま貴州省にいて、この風圧を避け得た。



胡錦濤

胡耀邦は中央政法委員会書記を喬石と交代させることを考えた。組織部長を務めていた喬石の後任には、常務副部長尉健行が昇格した。尉健行副部長の後任をどうするか。胡耀邦、喬石の共青团ラインは、胡錦濤に白羽の矢を立てた。このとき共青团内の「太子党派」が胡錦濤を誣告したために胡錦濤副部長案は流れた。もし胡錦濤がこのポストにあれば、胡耀邦失脚の風圧をまともに受けたはずだ。胡錦濤はその悲運を避けることができた。これは単なる憶測ではない。胡錦濤の腹心朱厚沢が胡耀邦辞任と同時に宣伝部長を解任されたことは、前車の轍なのだ。中共中央の権力闘争はまことに激烈なものがある。胡錦濤は共青团のエリートコースに乗りつつ、胡耀邦失脚の余波は避けた。他方、中央組織部系統のボス・宋平の眼鏡にかない、後継者作りの対象に選ばれ、ついには政治局常務委員たる宋平が引退に際して、みずからのポストを譲ったのだ。こうみえてくると、胡錦濤がきわめて順調に共産党の出世階段をかけたのぼったことが分かる。それを支えたのは天性のナンバーツーともいわれる彼の控え目な性格であろう。胡錦濤は爪を隠すことのできる能ある鷹なのだ。やたら偉ぶる前任者とは恰好の対照である。

### ③ 曾慶紅は江沢民の腹心か、それとも太子党のまとめ役か

中国の政治は政治局常務委員たるトップ9名によって動かされる。2002年秋の党大会で選ばれた政治局常務委員9名は（もともと常務委員であった胡錦濤の留任を除くと）、お手盛り昇格の匂いが強い。年齢その他の条件からして「引退はまだ早い、留任が許される」と判断した者たち8名が野合して常務委員昇格を画策し、成功したともいえる。これまでの7名の枠を9名にふやしなから、いまひとつ清新の気風に欠けるのは否めない（15期政治局委員のうち、年齢超過組、2期留任組、女性を除くとちょうど8名が残る）。

江沢民の腹心曾慶紅は9名のメンバーのうち序列第5位だが、江沢民の虎の威を借りて（?）、事実上はナンバーツーともいわれる。ただし、次の憶測は間違いだ。

『朝日新聞』[北京＝栗原健太郎電]（2003年8月4日付朝刊）は、「国家副主席が北戴河で会合」と報じた。曰く、中国の曾慶紅国家副主席が8月2日、河北省の海辺のリゾート地、北戴河を訪れた。新型肺炎SARS対策に貢献した専門家や、三峡ダム建設に従事する幹部らと面会したと新華社が伝えた。北戴河には毎年指導者らが集まって重要な会議を開いてきたが、胡錦濤新指導部はこの慣例を見直すことをきめた、と中国国内で報じられていた。2日の会合は指導者が各分野の功労者と面会し慰労する形をとってはいるが、会合には賀国強・党中央組織部長や徐才厚・人民解放軍総政治部主任らが顔をそろえた」。

この記事を読むと、胡錦濤が避暑地北戴河で会議を開く陋習をやめたいと提起した



曾慶紅

にもかかわらず、曾慶紅が賀国強組織部長や徐才厚総政治部主任と語らって、怪しげな「会合」を開いたかに見える。これでは胡錦濤のメンツはどうなるのかと思わせぶりな記事だ。

事実はなにか。特派員が用いた素材をインターネットで調べると、「曾慶紅、知識人は小康社会の建設において功業を建てなければならない（と語る）」という新華社北戴河8月2日電が出てくる。

これによると、曾慶紅はわざわざ北戴河を訪れ科学者を慰労した。慰労を受けたのは、「ここで休暇をとっている医療専門家と科学技術専門家」である。彼らが北戴河で休暇をとるに至った経緯は、「党中央と国務院が北戴河で休暇をとるよう招待した」ものだ。招待対象は「SARS対策で突出した貢献を行った医療専門家、SARS防疫突撃チームの全国責任者、国家の重点建設プロジェクトの総エンジニア、国家重大科学研究プロジェクトの首席科学者、国防科学技術専門家」などである。たとえば広州市第八人民医院院長・主任医師唐小平、北京佑安医院院長・主任医師趙春恵、軍事医学科学院副院長・教授黄培堂、中国工程院院士・解放軍総参謀三部研究員金怡濂、中国長江三峡ダム開発総公司総エンジニア張超然、中国科学院物理研究所所長・研究員王恩哥、中国航天科工集団三院科学技術委員会副主任・研究員劉永才らが主な招待客だ。

この座談会を司会したのは、中央組織部長賀国強（政治局委員、中央書記処書記）である。この会議にはさらに解放軍総政治部主任徐才厚（中央書記処書記、中央軍事委員会委員）のほか、国務院秘書長華建敏、国務委員陳至立なども出席している。先進的科学関係者座談会を報じたこの記事を読めば、事の経緯は明らかであり、少しもおかしな事実はない。

胡錦濤の提唱により、今夏は北戴河会議を止めた。そこで余裕のできた海浜の保養所を使って、科学分野で特筆すべき貢献をおさめた関係者を招いて慰労したのだ。その慰労の場を、曾慶紅、賀国強、徐才厚らが「主催者側として」あいさつに出向いたという話だ。これはまったく道理にかなった自然な話だ。この報道を素直に読むことができずに、「慰労する形をとってはいるが」などと書くのは、下司の勘繰りもはなはだしい。慰労する形をとりながら、曾慶紅が胡錦濤の鼻をあかす陰謀を公然とやっているという解釈をしたいのであろうが、それは無理というものだ。一知半解の記事とこれを増幅する不勉強デスクによるタイトル文字の選択は、ミスリーディングきわまりない。

もうひとつ、曾慶紅がらみの話題。7月16日、北京医院で92歳の「女紅軍」鄧六金が死去し八宝山革命公墓で告別式が行われたと報じられた。「女紅軍」とは、もちろん紅軍女性兵士を指すが、この女性は曾慶紅の母親だ。彼女は長征を歩き通した功績をもつ。華東保育院の創始者であり院長を務め、「鄧おばあさん」と慕われた。そこで育てられた「ゲリラ二世たち」から母親代わり、おばあさん代わりと慕われた。彼女は福建省上杭県の貧しい農家に生まれ、17歳で毛沢東・朱徳の率いる紅軍が上杭にやってきてゲリラ活動を呼びかけたのに呼応して参加した。貧乏人の味方がやってきたとばかりに、二人の姉とともにゲリラ部隊に参加したのだ。鄧六金の生まれた上杭

県およびその夫・曾山の生まれた吉安県がいずれも客家の里だという事実は、知る人ぞ知る常識である。ちなみに香港『明報』（7月23日）は「彼女は1911年9月福建省上杭の貧しい農家に生まれた。客家人である」と明記している。さらに彼女が面倒を見た子供でいま出世している人物として、陳昊蘇・中国対外友好協会会長（陳毅長男）、粟戎生・北京軍区副司令員（粟裕の子）、譚冬生・広州軍区副司令員（譚震林の子）、劉延東・中共中央統一戦線部部长（劉瑞龍の娘）の四人の名を挙げている。さらに鄧六金の生んだ四男一女に触れて、長男曾慶紅、次男曾慶准（文化部駐香港特派員）、三男曾慶洋（軍事科学院軍制研究部部长）、四男曾慶源（空軍後勤部副部长）、長女曾海生（総参謀部弁公庁副主任）の現在の地位を紹介している。

つまり、鄧六金は自分の四男一女を立派に育てあげただけでなく、陳昊蘇、粟戎生、譚冬生、劉延東なども育てたわけだ。曾慶紅の母親は女傑であった。さて息子の曾慶紅は母親を超えることができるのか。二世のカベは高い。

#### ④ 抜群の調整能力 — 温家宝国務院総理

中国では党のポストがナンバー1、行政のポストはナンバー2のものと位置づけられている。行政のトップ温家宝はいかにして国務院総理となったか。温家宝は1942年9月生まれ、胡錦濤と同年だ。原籍は天津市。65年4月に共産党に入党。同年北京地質学院地質系を卒業し、68年同大学院を修了した。温家宝もまた宋平が第1書記を務める甘肅省で、胡錦濤と似た状況のもとで働いた。地質学専攻に対応して、甘肅省地質局副処長、副局長を歴任。82年に40歳で中央に抜擢された。国務院地質鉱産部政策法規研究室主任を経て、副部長に昇格。その後国務院から中共中央弁公庁副主任に転じて、86年以来、中共中央弁公庁主任をまるまる8年務めた。このポストは、中国共産党の本部事務をすべて取りしきる重要ポストだ。温家宝は胡耀邦、趙紫陽、江沢民と三代にわたる総書記の「官房長官役」をこなした。その調整能力が抜群のものであることがわかる。この間、87年第13回党大会で中央委員に選ばれ（45歳）、中央書記処候補書記となり、中共中央直屬機関工作委員会書記を兼任。92年10月第14回党大会で中央委員に再選され、政治局候補委員、中央書記処書記となった（50歳）。92年に江沢民は総書記の地位を追認されると、上海からただひとり連れてきた腹心曾慶紅を中共中央弁公庁副主任の地位から、主任に昇格させた。こうして温家宝は足掛け8年にわたる弁公庁主任のポストを追われたのである。

その代わり、彼に与えられた仕事は、朱鎔基の助手役だ。中央農村指導小組副組長として朱鎔基の農村工作を補佐した。97年第15回党大会で政治局委員に選ばれ（55歳）、98年3月、全人代で国務院副総理に選ばれ（56歳）、引き続き農村工作を担当した。朱鎔基が金融改革の指導機関として中共中央金融工作委員会をもうけると、その書記



温家宝

としてとりしきる。金融改革は中国経済の市場経済への移行過程において最後の難関である。高度な知識を要する分野の調整役を経て温家宝は朱鎔基の後継者となった。

温家宝の幸運はなにか。江沢民が党の官房長官ともいべきポストを曾慶紅に与える決断をしたときに、たまたま朱鎔基がそこにいたことであろう。92年当時、朱鎔基は上海市長からいきなり副総理に抜擢されたばかりで、積極的に人材を物色できるような立場にはなかった。朱鎔基は江沢民が切り捨てた人材のなかから、後継者候補を選ぶ自由しかなかった。朱鎔基マシーンが本格的に始動したのは93年7月である。朱鎔基は副総理時代の5年間、保守派との抗争で時に足を掬われそうな危機を乗り越えて、果敢に改革を進めた。中国人民銀行総裁李貴鮮を解任し、みずからそのポストに就いて金融秩序の整頓に大ナタを振った。こうして高度成長を維持しながらインフレを抑えることに成功し、93年200億ドル足らずの外貨準備高を2003年6月3600億ドルと18倍にした。かつて人民元切下げ必至と軽侮した人々がいまは人民元切上げ要望を声高に語る。これこそ経済再建において確かな実績を挙げた朱鎔基の功績の端的な表現だ。

朱鎔基は1928年生れ、2003年春に惜しまれて引退した。この惜別の情が江沢民留任への反発に形を変えた。朱鎔基は建国のときに21歳、理科系の名門清華大学の学生運動のリーダーであった。その朱鎔基が党から除名された。エリート官僚の未来を踏みにじったのは、毛沢東時代の中国共産党である。20年以上も干されていた男を発掘し、宰相に任命したのは鄧小平時代の中国共産党である。同じ政党名を名乗っているが、計画経済を目指す共産党と市場経済を目指す共産党は、方向性がまるで逆だ。「悪魔のごとき敵」として排撃された商品経済は、いまや「見えざる手」として崇められている。計画経済を推進する共産党が朱鎔基を放逐し、市場経済を推進する共産党が朱鎔基を宰相に選んだのだ。中国経済の試行錯誤のジグザグ過程が朱鎔基の浮き沈みとそっくり重なる。

90年代のグローバル化する世界経済のなかでの中国の市場経済化の潮流こそが朱鎔基の采配を必要ならしめ、同時に市場経済への初歩的な成功こそがますます朱鎔基の能力を必要とする事態を生み出す。朱鎔基が上海市長から副総理まで、中国現代史においても希有な「3階級特進」（第1副総理まで数えると4階級特進）したのは、91年4月である。朱鎔基は87年10月の第13回党大会で中央候補委員に選ばれた。当時は中央委員が175人、中央候補委員は110人である。朱鎔基は序列91位の候補委員（得票順）なので、全体の序列では266位である。しかもこのときは中央委員のうえに中央顧問委員が200人いたことを計算にいれると、政界順位466位とみることできる。

朱鎔基の「エラさの程度」は、辛うじてビリで当選したわが衆議院議員といったところであろう。この種の陣笠レベルの議員が5人の副総理のうちの1人になり、ついで総理に次ぐ第1副総理に昇格したのであるから、鯉の滝登りにも似た大出世である。天安門事件以後の保守派主導ムードのもとで、改革開放路線が「名存実亡」化している窮状から脱出するために、鄧小平が敢えて断行した奇策であった。

今年2004年は鄧小平生誕100年に当たる。鄧小平は、二つの顔に分裂しているように受け取られている。一つは中国経済の発展の基礎をつくった白猫黒猫論である。すなわち白猫であれ黒猫であれ、ネズミを捕るのがよい猫だ。資本主義的方法であれ、社会主義的方法であれ、経済発展に役だつ方法こそがよい方法だと、喝破した実事求是の作風は、見事な成果を挙げた。他方、天安門広場の武力鎮圧に象徴される開発独裁のイメージはいまなお人々の記憶に新しい。当時中国の学生たちは、ペレストロイカの旗手ゴルバチョフを歓迎して、鄧小平を非難した。しかし鄧小平は朱鎔基を抜擢し、朱鎔基に温家宝教育をやらせて静かに消えたのである。中国の政治は民主的とはいえないが、決して衆愚政治ではなく、あえていえばテクノクラート独裁である。

### ⑤ 温家宝総理以下の國務院の行政執行体制

温家宝を支える4人の副総理がいる。黄菊、呉儀、曾培炎、回良玉である。黄菊は筆頭副総理であり、事実上の常務副総理として温家宝の代理役である。上海市長、上海市書記を経て昇格した。原籍は浙江省嘉善、清華大学電機学部卒のテクノクラートだが、その評判はいまひとつさえない。信任投票ではワースト3位であった。江沢民のイエスマンであることが不評の主因である。黄菊の次の副総理は呉儀である。原籍は湖北省武漢、北京石油学院石油精製学部卒のテクノクラートである。対外貿易経済合作部長としてWTO加盟の指揮をとった。副総理昇格は対外経済担当を想定してのことであったが、SARS騒動が起ると、更迭された衛生部長の後任を兼任して、対策の指揮をとった。魅力的な独身女性である。副総理はあと二人いて、曾培炎と回良玉である。それぞれ工業問題と農業問題を分担する。曾培炎の原籍浙江省紹興、すなわち紹興酒の故郷である。清華大学無線電学部を出たテクノクラートである。回良玉の原籍は江蘇省無錫、学歴は吉林農業学校経営管理学部である。少数民族の回族である。4人の副総理のほか「副総理級」のポストとして、5人の「國務委員」がいる。総理、副総理の5人体制では、煩雑な行政を分担しきれない。そこでさらに5人が総理を補佐する体制になっている。年齢順に挙げると、曹剛川は国防部長兼任であり、むろん軍事問題担当である。唐家璇は原籍、江蘇省鎮江、北京大学卒、前外交部長であり、当然外交担当だ。華建敏は原籍、江蘇省無錫、清華大学卒で國務院秘書長を兼任する。すなわち國務院の官房長官役である。陳至立は原籍、福建省仙遊、復旦大学卒、前教育部長であり、教育問題担当である。周永康は原籍江蘇省無錫、北京石油学院卒のテクノクラートだが、公安部長を兼任して、警察担当である。

以上10名が國務院常務会議のメンバーであり、これらの人々によって中国の閣議が開かれる。平均年齢は63.3歳である。10名のうち5名が江蘇省、浙江省出身だ。上海・江蘇・浙江は上海経済圏といわれるが、経済的に豊かなために学歴が高く、エリートになる条件に恵まれていることの反映であろう。10名の学歴をみると、清華大学3名、復旦大学2名、北京石油学院2名といった具合に、名門大学卒業生が目立つ。中国の閣僚たちの学歴は世界的にみても、最も高学歴である可能性が高い。1940年前後に生まれ、共産党政権下で60年前後に大学生を送った。彼らは大学を出る



黄菊



呉儀



曾培炎



回良玉

と、それぞれの専攻に応じた役所に「配分」され、そこで出世競争を生き抜いてきた人々だ。日本にたとえると、東大や京大を出て役所に入り、次官までのほりつめたような人種である。彼らは共産党員であるまえに、テクノクラートである。政治スローガンを叫んで足れりとする時代は、はるか昔のことであり、いまの中国の指導者たちは、高学歴で科学技術や外国語に堪能なテクノクラートであるという事実をしっかりと見据えておく必要がある。

総理・副総理・國務委員からなる國務院常務會議が重要な行政を処理するが、特に重要な問題については、國務院全体會議が開かれる。この全体會議には前述の常務會議メンバーのほかに、27名の部長・主任が出席する。そのポスト、氏名、学歴は次の通りである。

国防部長＝曹剛川（軍第3砲兵軍械技術学校、兼任）、衛生部長＝呉儀（石油学院、兼任）、司法部長＝張福森（清華大学）、労働社会保障部長＝鄭斯林（太原理工学院）、外交部長＝李肇星（北京大学）、国土資源部長＝田鳳山（軍第2砲兵技術学院）、水利部長＝汪恕誠（清華大学）、監察部長＝李至倫（北京政法学院）、国家安全部長＝許永躍（北京人民公安学校）、人事部長＝張柏林（吉林大学）、建設部長＝汪光寿（同濟大学）、審計署長＝李金華（中央財政金融学院）、国家民族事務委員会主任＝李德洙（延辺大学）、文化部長＝孫家正（南京大学）、国家計画生育委員会主任＝張維慶（北京大学）、財政部長＝金人慶（中央財政金融学院）、民政部長＝李学学（中央党校）、商務部長＝呂福源（吉林大学）、信息産業部長＝王旭東（天津科学技術進修学院）、国家發展改革委員会主任＝馬凱（中国人民大学）、教育部長＝周濟（清華大学）、国防科学技術工業委主任＝張雲川（ハルビン軍事工程学院）、農業部長＝杜青林（東北師範大学）、中国人民銀行＝周小川（清華大学）、交通部長＝張春賢（東北重型機械学院）、鉄道部長＝劉志軍（不明）。これら27名の平均年齢は59.4歳である。大学あるいはそれに相当する高等教育機関でそれぞれの専門を学んだあと、政府機関や国有企業などで出世競争を生き抜いてきた人々だ。年齢からみてもまさに日本の事務次官級に匹敵するようなエリート官僚たちだ。原籍をみると、江蘇省8名、上海市3名、河南省3名、吉林省3名が目立つ。学歴別にみると、清華大学4名、北京大学2名、吉林大学2名、北



京石油学院2名、中央財政金融学院2名などが目立つ。石油学院や財政金融学院などの単科大学は、旧ソ連の学制を模倣したものだが、近年の流行は総合大学志向に変わりつつある。これは学際的研究課題の解決という世界的潮流と同じだ。

党大会および全人代において決定された人事紹介の結びとして、一連の選挙における投票結果を反対票の多い順に並べてみよう。いわば中国指導者の「不人気度ランキング」である。ワースト1は、曾慶紅の国家副主席人事だ。ワースト2は陳至立の國務委員昇格、ワースト3は黄菊の筆頭副総理昇格、ワースト4は賈慶林の全国人民政治協商会議主席人事だ。そしてワースト5は元締め江沢民の国家中央軍事委員会主席留任である。いずれも江沢民人脈がかなり嫌われていることを示すものだ。逆にこの表からは、胡錦濤や温家宝への強い期待も読み取ることができよう。

## ⑥ イデオロギーの虚実を見極める

### 1. 計画経済から市場経済への移行

中国の執政党は中国共産党である。その名称は毛沢東時代から変わっていない。だがその政策は水と油ほどの違いがある。「一党独裁」の名称は同じでも、その内実はすでに決定的に異なる。かつては文字通り共産主義社会を目指したが、いまはそれを否定する政策を強力で推進している。巨視的に観察すれば、それは複数政党型政治に向かう大きな過渡期の一段階にあると位置づけてよいであろう。中国は計画経済体制から市場経済体制に移行する過渡期に位置しており、経済的側面を見ると、その移行はほぼ完成しつつある。

1992年の第14回党大会で「社会主義市場経済」というキーワードが採択され、93年秋には「社会主義市場経済への50カ条」に発展させた。これはさらに97年に開かれた第15回党大会の政治報告で確認され、「社会主義市場経済」というキーワードは日々「社会主義」という形容句抜きの「単なる市場経済」に向かって発展しつつある。市場経済論の前史として、一つは84年10月の「経済体制改革についての決定」、もう一つは87年10月の趙紫陽政治報告（「国家が市場をコントロールし、市場が企業を誘導する」体制の構築）を挙げることができる。過去を回顧すると、市場経済化への軟着陸の過程が曲折した過程をたどったことを理解できるとともに、同時に中国の市場経済化の歩みが着実であったことも理解できるであろう。鄧小平はその目標を「中国の特色をもつ社会主義」の建設においたが、その内容を知るには、『鄧小平文選1975～1982』（第2巻）、および『鄧小平文選1982～1992』（第3巻）などが参考になる。鄧小平はある日突然に変身したわけではない。毛沢東時代の鄧小平を知るには、『鄧小平文選1938～1965』（第1巻）が役だつ。「社会主義市場経済」体制とは、その政策を分析すると、「社会主義の有言不実行、資本主義の不言実行」の体制にはかならない。

中国共産党の大きなイデオロギー上の困難を克服する試みが江沢民の提起した「三つの代表論」である。中央文献出版社から2001年8月に出た『論三個代表』という185ページの本には、2000年2月15日の講話「新たな歴史的条件のもとで、わが党

はいかにして『三つの代表』をやりとげるか」から、01年7月1日の建党80周年講話まで、11本の講話が収められている。これは「重要思想」とされ、全党的に学習が呼びかけられているが、矛盾の真の解決策というよりは、糊塗策にすぎないと思われる。

WTO加盟後、中国市場経済の現実、もはやイデオロギー解釈は問題ではなく、国際的誓約である議定書をはじめとするWTO加盟文書をいかに誠実に執行できるかが、今後の中国を見る準則になる。この英語公式テキストからの日本語訳が『全訳中国WTO加盟文書』（荒木一郎、西忠雄共訳、蒼蒼社）である。全文の検索ができるCD-ROMが付いている。中国語訳は全国人民代表大会常務委員会『公報2002・特刊 中国加入世界貿易組織法律文件』（全人代常務委員会弁公庁、792ページ、50元）という書籍の形で出版されている。

## 2. 政治改革の展望

中国共産党は1921年7月1日に結党された。2004年の7月1日に83回の建党記念日を迎える。胡錦濤国家主席が前年行なった「記念講話」の内容は西側マスコミの期待に反して政治体制改革を強く打ち出したものではなく、江沢民路線のなかに目立たない形で胡錦濤色をにじませるにとどまった。胡錦濤・温家宝体制はまだ船出したばかりであり、2004年夏の時点では、政治体制改革に踏み出すだけの準備を整えてはいないことが示された。SARS騒動を契機として、中国の政治改革の課題は明白になってきたが、これは容易ならざる課題であり、胡錦濤執行部にはまだその準備がないようだ。

ゴルバチョフのペレストロイカのように「始まった途端に終わる」改革では、単に混乱をもたらすのみだ。経済発展のなかで中産階級を育成し、これらの階層を担い手として、ゆっくりと着実に政治の民主化を進める段取りが必要だ。政治改革を考えるための一つの材料として元毛沢東秘書のオールドボルシェビキ李銳の改革論を紹介してみよう。彼は2002年秋の第16回党大会に「政治体制改革の意見書」を送り、党大会分化会で発言した。

## 3. 李銳意見書の骨子

李銳意見書の骨子は「党の民主化」と「国家の政治生活の民主化」の二つからなる。「党の民主化」について、李銳は次の5カ条を挙げた。(1) 政治局常務委員は任期を5年として、再選まで、10年を期限として引退すること。党と行政、全人代と政協、これら四つのポストを渡り歩くことを禁止する。要するに党幹部の終身制をやめて任期制とすること。(2) 次の第17回党大会(2007年)から政治局委員、政治局常務委員、総書記は候補者を定員の25%以上多く立て、そのなかから競争的選挙で選ぶシステムをつくること。(3) 「全党は中央に従う」という言い方は適当でないから、これを「全党は大会に従う」と改めること。党大会は5年ごとなので、その間は「党大会選出の常任代表制」を設けて、執行部の活動を点検すること。(4) 党内における言論

の自由を保証すること。重大な政策については集団で討論したのち採決により決定すべきであり、書記の独裁を避けなければならない。(5) 党のいかなる組織も個人も憲法の規定を超えて活動してはならない。党の政法委員会書記が国家の司法に介入することは法治の原則に悖るものだ。「党の存在を法の存在よりも上に置き」、あるいは「人治を法治の上に置く」（「党大於法」「人治大於法治」）のは、許されない。

李銳の考え方は、トロツキーが「代行主義」としてスターリニズムを批判し、歴史家ドイッチャーが定式化して以来の古くて新しい問題である。すなわち党大会で中央委員が選ばれ、中央委員会で政治局委員、常務委員が選ばれ、さらに総書記が選ばれるのであるから、その母体となる党大会にこそ最も権威があり、その代理人として、中央委員会や政治局、総書記ポストが存在するはずである。

しかしこの構図は、ひとたび選挙が終わると逆転してしまう。すなわち総書記が政治局に君臨し、支配し、中央委員会を支配し、ひいては党大会を操作することになる。こうして党大会から総書記に至る「代行制」は、上下関係が逆転し、個人独裁、第1書記の独裁の構図に墮落するというのが『トロツキー伝』を書いたアイザック・ドイッチャーの「代行主義の論理」であった。

この逆転の構図はスターリン統治下の旧ソ連で見られただけでなく、文化大革命期の中国では毛沢東独裁、毛沢東に対する個人崇拜の形で一世を風靡した。鄧小平時代以後の中国では文化大革命期のような個人独裁は姿を消したが、やはり南巡講話などから明らかなように鄧小平の権威は大きかったし、最近では、江沢民の軍事委員会主席への留任は、党内民主主義の手続きになお大きな問題点のあることを示唆している。党内民主主義をいかに貫くか。どのようなシステムへの改革が必要かという問題は、古典的な命題であるとともに現代的課題でもある。中国共産党は建党80余年になるが、いまだ党の民主化に成功していないと85歳の老革命家は嘆いているわけだ。

李銳の提案のもう一つの内容は、「党と政府との関係」に関わるものだ。同じく五カ条からなる。(1) 党の名において直接的に全人代を指揮するのは許されない。党員フラクションや党員個人が影響力を行使する形でやるべきだ（これはレーニンなども党内民主主義のあり方としてしばしば強調したものである）。全人代自体の改革についていえば、定員数を減らし、官僚の比率を減らし、専門化することによって、行政への監督機能を強化すべきである。(2) 違憲審査権をもつ「憲法院」を新設し、憲法による統治を実現するとともに「公民の利益を保護する法律」「新聞出版法」などを制定し、公民の権利を守るべきである。(3) 「党政不分」「党による行政の代行」の陋習をやめて、党の指導と行政の役割を峻別しなければならない。(4) 執政党としての共産党がみずからを監督するだけでは不十分である。他の政党による監督が必要だ。民主党派や党外人士には、お飾りの「副職」（ナンバーツーのポスト）ではなく、「正職」（ナンバーワンのポスト）を与えるべきだ。(5) 「三農問題」（農業、農民、農村問題）にはすでに注意が向けられているが、「増産したが増収にはならない」とか、「農村幹部の不正」に対する怒りは溢れている。村民自治を貫徹し、政務を真面目に公開し、農民組合の組織化を認め、農民の利益を守るべきである（李銳「我国政

治体制改革的建議』『炎黄春秋』2003年第1期)。李銳の建議はいずれもきわめて古典的なものであり、中国では特に80年代の胡耀邦改革期以来、強調されてきた考え方である。これらは鄧小平・江沢民時代を通じて無視されてきたが、胡錦濤・温家宝時代には、少なくともこれらの提案のうちいくつかは実現されるものと私は予想している。そうしなければ、中国共産党が執政党の地位から転落するであろうことは、旧ソ連東欧の経験からしても、あるいは台湾で国民党政権が崩壊したことからもまず疑いの余地はあるまい。古来、水は舟を浮かべるが、舟を覆すのもまた水である、という。共産党政権という舟が人民に覆される悲劇を避けるには政治改革が不可避である。

## ⑦ 情報はインターネットから。検索を活用する

国家重点ネットワークは、次のネット・システムからなる。

「人民網」=『人民日報』の系列 <http://www.people.com.cn/>

「新華網」=新華通社系列 <http://www.xinhuanet.com/>

「中国網」=國務院系列 <http://www.china.com.cn/chinese/index.htm>

「央視国際」=中央電視台の系列 <http://www.cwrank.com/Links/SiteID=www-cctv-com.html>

「中国日報」=英文 China Daily の系列 <http://www.chinadaily.com.cn/>

「国際在線」=中国国際放送系列 <http://www.cri.com.cn/>

「中青網」=中国青年報系列 <http://www.cycnet.com/>

「中国経済網」=『経済日報』の系列 <http://www.ce.cn/>

からなる。

このほか、中国台湾網 <http://www.chinataiwan.org/>

宗教問題を扱う明鏡網 <http://www.mingjing.org.cn/indexc.html>

などがある。インターネットの大海で溺死しないためには、この海の深さと広さを知ることが肝要だ。そのパイロット役を果たすのが「検索ソフト」である。

ホームページの検索には、

中文版雅虎(ヤフー) <http://cn.yahoo.com/>

新浪 <http://home.sina.com/jump/?www.sina.com.cn>

搜狐 <http://www.sohu.com/>

などの検索が役に立つ。その速報性とコストの安価さという意味で、チャイナ・ウォッチャーにとって最も重要な情報源はインターネットに尽きる。

## ⑧ 中国中央電視台を見る

文字情報と音声情報を比較すると、音声のほうがはるかに速い。いまや

「大富」 <http://www.cctvdf.com/>

なるケーブルテレビが中国の中央電視台の放送をたえず中継し、日本でも普通の家庭用テレビで直接的に見ることができる時代になった。胡錦濤や温家宝がどのような表情で外国の賓客を迎えているのか、カメラの伝える情報力の方がはるかに優れており、

映像情報から知ることのできるものはやまほどある。それだけではない。

中央電視台のホームページ <http://www.cctv.com/default.shtml>

では「焦点訪談」のような人気番組についての問題追求と応答のエッセンスが文字情報で説明されている。テレビを見て、さらに画面で確認することができる。これから中国語を学ぼうとする者にとって、いまやナマの音声とナマの画像は満ちあふれている。これは少し前には、予想さえできなかったような大きな変化である。ラジオもいい。北京時間夜8時から約30分、毎日全国のローカル局を結んで「連播節目」すなわち全国中継プログラムを放送している（北京時間は通常は日本よりも一時間遅れる）。いわばNHKの7時のニュースに相当するものだ。これさえ聞いていれば、大事なニュースを聞き漏らすことはない。北京放送は「日本語による放送」も行っているが、これは対外宣伝色が強く、中国の国内情勢の分析という点では限界がある。

## ⑨ 新華社、中国通信、そして外国通信社、新聞社の報道

テレビやラジオは速いが、聞き漏らすおそれがある。それを防ぎ、内容を確認するには、新華社、正式には

中国新聞社 <http://www.chinanews.com.cn/>

などの文字情報がある。新華通社は中国の国营通信社であり、中文と英文のニュースを流している。それらはインターネット上で読める。日本の『日刊中国通信』は主にその日本語訳サービスを提供している。外国通信社としては日本の共同通信、時事通信、アメリカのAP、UPI、フランスのAFPなどがよいニュースを送っている。

英『フィナンシャル・タイムズ』の中国語版 <http://zhongwen.ft.com/zhongwen> は、このところたいへん充実して盛りだくさんの経済ニュースを発信している。

米『ウォールストリート・ジャーナル』 <http://chinese.wsj.com/gb/index.asp> の中国語版も経済情報が多い。

日本の各紙にはこれらの通信社のニュースのほかに自社特派員の通信も掲載されている。それらを比較しながら読むと、記者や通信社の力量がよくわかる。そのチガイがわかるようになると、チャイナ・ウォッチングはたいへん楽しくなる。ウォッチャーをウォッチするほど愉快なものはない。

## ⑩ 「大報」と「小報」の関係、ネット上の新聞と印刷新聞との関係

インターネットで中国の新聞を読むには「大報」すなわちメジャー新聞と「小報」すなわちマイナー新聞との相互関係に着目する必要がある。

たとえば『人民日報』は、本体 <http://www.people.com.cn/> のほかに、『京華時報』、『国際金融報』、『江南時報』、『証券時報』、『市場報』、『環球時報』、『中国汽車報』、『健康時報』、『風刺与幽默』、『新聞戦綫』、『大地』、『時代潮』、『人民文摘』、『人民論壇』、『上市公司』、『汽車族』、『綠色家園』、『信息導刊』、『新安全』などの新聞や雑誌を系列下にもっている。この場合、『人民日報』が大報であり、残りはすべて「小報」に数えられる。

上海の『解放日報』グループ <http://www.jfdaily.com.cn/>



「大富」<http://www.cctvdf.com/>

は、『解放日報』『新聞晨报』『新聞晚报』『申江服務導報』『報刊文摘』『I時代』『房地産時報』『上海小説』『支部生活』『上海学生英文報』などの新聞や雑誌をしたがえる。

広州の『南方日報』グループ <http://www.nanfangdaily.com.cn/southnews/>

系列下の新聞は、『南方都市報』『南方周末』『新京報』『21世紀經濟報道』『南方農村報』『南方体育』『城市画報』などがある。

広州の『広州日報』グループ <http://www.gznet.com/>

は『信息時報』『贏周刊』『舞台与銀幕』『広州文摘報』『南風窗』『美食導報』『英文早報』『商旅導報』『看世界』『新現代画報』『現代育兒報』『老人報』『足球報』などのメディアからなる。

広州の『羊城晚报』グループ <http://www.ycwb.com/>

の傘下にあるのは、『新快報』『民營經濟報』『羊城体育』『新聞周刊』『粵港信息日報』『広東建設報』などである。

北京の『經濟日報』グループ <http://www.ce.cn/>

は『中国化工報』『中国紡織報』『中国建材報』『中国花卉報』『中国県城經濟報』『中国服飾報』『証券日報』『服装時報』『名牌時報』（ブランド新聞）『經濟月刊』『中国企業家』『中国經濟信息』『中国石油石化』『裝飾裝修天地』等である。

『中国青年報』グループ <http://www.cyd.com.cn/>

のサイトは「中青在線」（中国青年オンライン）であり、ここからサーフィンできる。

『証券時報』 <http://sh.p5w.net/p5w/home/stime/today/index.html>

中共中央宣伝部のマスコミに対する統制はかなりきついが、そのきつさは「大報」と「小報」とで異なる。「小報」の一部は日本の週刊誌にも似たセンセーショナルリズムであり、著しく商業主義に毒されている。（矢吹晋／21世紀中国総研ディレクター）